

グラスフェッドのすすめ

(有)シェパード 獣医師 松本大策

2: 舎飼いを取り入れたグラスフェッド

冬場に雪に埋もれてしまう、とか冬場は草がなくなってしまう、なんて場合は舎飼いを取り入れての放牧をしなければなりません。北海道の放牧型グラスフェッドや岩手県の誇るプレミアム短角牛はこのタイプに入ります。プレミアム短角牛は、冬場、雪に閉ざされる期間は牛舎の中で飼育され、春になると放牧地に母子で放牧され、秋には里においてくる「夏山冬里」方式と呼ばれています。放牧期間中に自然交配も併せて行われるため、翌春には、新しい子供が生まれ、母子ともに放牧地へ、という具合に舎飼いと放牧を併用したグラスフェッドで肥育まで育てます。母子ともに放牧出来るため、放牧馴致も速やかに出来るという一貫肥育の利点も生かしています。

あるいは、放牧地が少ない場合は、いっそ割り切って牛さんは舎飼いにし、土地を純粋な「採草地」として利用すれば、放牧向きでないトウモロコシやスーダンなどの背の高い草も作れますし、やはり放牧の際は草丈の調整が問題になるイタリアンやオーチャード、チモシーなどをしっかり作って乾草やサイレージにして飼育することも可能です。このやり方の利点は、なんと言っても採草地として利用することで、牧草の収穫量も多く単位面積あたりの飼料生産効率が高いと言うこと。さらに、牛さんの運動量が少ないために、消費カロリーが少なく肥育効果が高い、ということ。そしてもう一点は、牛さんの糞便を堆肥処理できるため、環境負荷が少ない、ということです。さらには、先ほどからお話ししている放牧の危険な面を避けることができ、放牧馴致の手間もかかりません。

逆に短所としては、牧草の収穫・乾草化・サイレージ化、などの手間がかかること。そして、牛舎の敷き料交換や堆肥処理などの作業が必要になってくること、などです。よくよく考えると、長所と短所は裏表なのですね。



写真: 巨大なバンカーサイロ

完全舎飼いによるやり方は、濃厚飼料を併用するなどの方法をとれば、単位面積あたりの飼養頭数はもっとも稼ぐことができます。この狭い島国で、放牧で牛を飼うだけの土地が確保できる場所は限られますからね。元々日本の農業は、土地集約型ではなく、労働集約型であることを考えると、日本型といえるかもしれません。





写真: 給餌風景1



写真: 給餌風景2



写真: 中国の肥育牛の肉2



写真: 中国の肥育牛の肉1

舎飼いを取り入れたグラスフェッドには、意外に中国の肥育方法が参考になるかもしれません。中国では、15ヶ月齢くらいまでトウモロコシの茎のサイレージ(日本みたいなホールクロップ(トウモロコシの実まで入ったサイレージ)ではありません。)を14kgくらい食べさせます。(写真: 巨大なバンカーサイロ及び給餌風景2)その後2~3ヶ月くらい、「肥牛」として配合飼料を1日4kg程度与えて出荷するのです。牛は黄牛という中国の在来種や、黄牛とシンメンタールやリムジン、シャロレーなどの外国牛との交配種(写真: 給餌風景1)ですが、サシが入る牛さんにはBMS3~4(写真: 中国の肥育牛の肉1・2)は入っているものもいます。やはり肉質には牛個体の能力の影響は大きいよう

です。こういったことを考えると、日本の黒毛和種(安いやつね)を利用したグラスフェッドでも適度なサシは期待できると思います。

これまで、トウモロコシを利用した牧草作りでは、ラッピングサイレージが作りにくいという問題がありましたが、今ではトウモロコシをカットしながらラッピングしてくれる機械もできて、栄養価の



写真: 裁断型ロールベラー原典: 良質飼料の集約的生産 <http://www.nlbc.go.jp/tottori/ex-esa>



高いトウモロコシのホールクroppサイレージを簡単に作ることができるようになりました。これを使えば、中国の「肥牛」よりもずっと栄養価の高い飼料ですから、さらによい肉質も期待できます。実際、岩手県のプレミアム短角牛の肥育では、この機械を使って、良質のホールクroppサイレージをラッピングで手軽に作って利用することで、純国産トウモロコシを飼料の70%使用して、東京のシェフにも評判の牛肉を作っているのです。以前このサイトでご紹介した農産物流通コンサルタントの山本謙治さん(通称やまけん:サイトは<http://www.yamaken.org/mt/kuidaore/>)もご自身のブログで、岩手のグラスフェッドによる短角牛(プレミアム短角)を絶賛されています。



写真:プレミアム短角(東京財団のHPより)

3:代謝インプリンティングを利用したグラスフェッド

これは、九州大学の後藤先生が提唱なさっているもので、一般の肥育とは逆に、育成期にしっかり太らせて、そのあとグラスフェッドに移行すると、いわゆる「太りやすい体質」になっているため、牧草による肥育の効率が良く、脂肪交雑(サシ)も入りやすい、というものです。もう少し詳しくお話しすると、牛さんは10ヶ月齢くらいまでに代謝(生きていくための身体の様々な働き)の仕組みが決定するので、2ヶ月齢から10ヶ月齢まで濃厚飼料を自由に飽食させておくと太りやすい子牛ができあがるらしいのです。つまり「代謝インプリンティング」とは、10ヶ月齢までに「体を動かす仕組みを刷り込む」ということなのです。

これを利用するという事は飼料摂取量が少なくすむチビちゃんのうちに、濃厚飼料を多給し、一般には濃厚飼料を多給する時期である「肥育期間」を粗飼料で肥育することで、濃厚飼料の給与量を軽減することが出来るのです。

しかも、こうして太りやすい代謝の子牛を育てておいた上で、その後の肥育を粗飼料でやると、従来の粗飼料主体で育てた子牛をグラスフェッドで仕上げた場合と比較して、体重で1.3倍大きく(育成期に粗飼料主体の区は438kgであるのに対して、育成期に濃厚飼料多給を行った区では604kg)、また骨格筋内の脂肪含有率が約3倍高かったというのです。

この代謝インプリンティングを利用したグラスフェッドは、まだまだこれからいろんな試験を重ねないといけないそうですが、グラスフェッドの一つのオプションとして大きな期待がかけられそうです。

